

SE900

MARCH 1970

GAZETTE



A University Open to the World

ナバラ大学

By Kishiro Ogaki

**“Navarre shall be the wonder of the world:
our court shall be a little academe, still
and contemplative in living art”**

**W. Shakespeare: “Love’s labours lost”
Act I, Scene I, vv. 12-14**

スペインの北部にあるナバラ県は、スペインに於ても独得な歴史を歩んできた県である。というのも15世紀中葉の王国合一の流れの中で、ナバラ県は、悠々と地方分権政府を、独自のナバラ気質で、ついに1841年まで維持してきた歴史を持っているからである。そして現在、フランコ政権下のスペインでも、唯一の独立の財務運営管理を行っている。経済的には王国の名残りを止めているとも言えよう。このナバラ県のパンプローナ市に、スペイン唯一の私立大学が1952年に誕生した。つまり今日のナバラ大学である。

まず、ナバラ大学を紹介する前に、少しスペインの大学の歴史を振り返ってみることにしよう。スペインの大学の設置

は古く12世紀にさかのぼる。サラマンカ大学は、パリ大学と並んで中世から知識の宝庫であった。そして現在では、サラマンカと共に、マドリッド、バルセロナ、バヤドリッドの諸大学をはじめ、約15の国立大学がある。古く16世紀のナバラ王国でも大学設置の強い願いがあったが実現には至らなかったが、ついに1952年、歴史的にも、地理的にも望まれていた大学設置の夢が実現したのである。その前身を見ると、8人の教授と48人の学生が居た法学部に立戻る。続いて医学部、薬学部の順で成長し、1955年には、文学部が生まれ、長足の発展のスタートを切ったのである。

目下、世界を牛耳っている student

power の威力は、スペインでも例外ではない。そんな世界的な風潮の中で、大学紛争の渦にも巻き込まれず黙々と騒ぎを外に講義を続けているナバラ大学を紹介するのもおもしろいだろう。誤解のないよう断っておくが、いくらフランコ独裁政権下でも、現代の大学生の力には権力は通用しないようである。その証拠に一昨年末から、スペイン学生運動も闘牛の如く勇しく荒れ全学閉鎖が続いている。少し前にも、バルセロナ大学総長が窓から放り出されかけたり、また、フランコの胸像をみごとに足蹴した学生も出る始末。では、そんな風潮の中で堂々と我が道を歩んでいるナバラ大学とは、どんな大学であろうか。私の3年になる留学の体験を混じえて紹介してみよう。

まず、ナバラ大学を正しく理解するには総長の言葉を紹介するのが当を得ていると言えよう。Monseñor Josemaría Escrivá de Balaguer がその人である。彼の言葉を引用すると、

‘ナバラ大学は、当時から切望していたことだが、まず本大学が他の諸大学と手に手をとって社会に貢献し、そしてスペインや諸大学の重大な教育問題を解していくことを強く望んでいる。それには、より公正な社会を建設すべき立派な基盤の出来た人間が必要である。’

総長によると、大学とは単に頭を満たす場を提供するのではなく、大学自体がキリスト教徒にふさわしい人間陶冶の学府へと努力しなければならぬし、学生



University of Navarre: Central Building



A lecture in the Science of Education Institute

も将来社会の担い手として、各自の仕事に対する意義を見い出さねばならないことになる。ここで私見を述べると、日本人にとって、確かに人生をキリスト教に沿って生きようが否が、余り重大ではないだろう。しかし、日本古来の伝統に沿った生き方も、今やその方向を見失いかけてはいないだろうか。その顕著な一例が現代の大学にも浸透されんいるように思える。今こそ改めて大学とはなんぞやを考え直さねばならない。数多い名ばかりの大学の増化と、今日の学生運動を振り返ると問題は山積みである。そんな世界的な不安定な大学の空気の中で、正面切って、キリスト教に沿った建学の精神を堂々と通し、大学紛争の嵐の中で静かに我が道を力強く着実に進んでいるナバラ大学は、宗教問題とは別に注目したくなるのは私だけではないと思う。

大学本部があるパンプローナには、現在6学部がある。法学部、文学部、医学部、薬学部、理学部、教会法学部、その他に建築研究所、神学、新聞、教育、文芸、言語の各学科がある。又、サンセバスチャンには理学部、産業研究所、秘書庶務学院、バルセロナには、経営学科がある。以上の統合がナバラ大学を構成している。そして伝統的な学問の追求と、今日の世界の要求に最も適したカリキュラムの二本立てで幅広い教授陣営をしいている。1963年には世界大学連盟にも加盟しており当大学の学位の国際性を証明している。

各学部の授業は、詰込みのマイク講義はほとんどなく、小グループの教育方式が可能な大学である。当然テストも面接形式が多いし、週に一度は教授との個人的な意見交換が行わたている。そんな姿が広い緑のキャンパスでは普通の景色となっているようだ。かくして1952年に発足したナバラ大学は、教授陣の充実と教育設備の完璧性が、いち早く世界各国に知られ、1965年には375人の教授陣と4140人の在學生と、ヨーロッパ各国、米

大陸、アジア、アフリカからの多数の留學生を数えている。又1968年には、6900人の學生と668人の教授陣に成長したことをつけ加えておこう。又、ヨーロッパの地理的長所を生かしての、教授の出入り、交流も栄かんで、更に同テーマの共同研究、同じ教育課程の実施、講演、学会など日本では考えられないような人間の往来がある。そのための学会誌、博士論文の出版などが絶えないのは、我々学ぶ者にとって実に大きな安心感と信頼を与えている。

一步目を學生に当ててみると、これも国際色がたっぷりである。「ラテン・アメリカ人会」・「アフリカ人サークル」・「アジアクラブ」などの異色が注目を引いている。私も昨年はアジアクラブの相談役として、インド人の会長、フィリピン人の書記長と共に仕事をしてしたが、時には思わぬ国民性の違いを強く認識したことを覚えている。

大学の始業式は、10月の第一週目に始まり、翌年6月下旬で学業年度が終る仕組。その間、三学期に区切られ、6月は試験だけの月となっており、全範の総合テストがあるのはこの頃である。勿論、学期毎のテストもあるが、普通は義務でなく自由参加の場合が多い。授業風景を少しスケッチしてみると、ほとんどがノート講義で、教科書といったものはなく猛スピードのスペイン語に泣かされることもしばしば。時たま、ポツンと単語を黒板に書いてくれる時、我々外人學生にとって思わずため息の出る瞬間である。こんな時、タバコを一服ふかすことが出来るのも日本と違っている。休暇は



Seminar in Roman Law



Future Journalists in a practical course on radio

カトリックの国らしく、クリスマスと新年の前後と3月下旬の復活祭、それに6月下旬から10月まで3ヶ月の長い夏休みがある。ちょっと隣のフランスやイギリスに足を伸ばすのはこんな時である。

ナバラ大学の各学部の内容を略述してみよう。スペインの大学は普通5ヶ年が学業年数であり、6年目にはすぐドクターコースが控えている。5年目は実質的に日本の修士課程に相当するかもしれない。ドクターコースに入る者は、6年目に小論文を書き、7年目に博士論文の準備を始めるのである。来年度よりナバラ大学では、スペインの国立大学の先を切ってマスターコースの課程が初めて生れようとしている。

法学部はナバラ大学で最も古い歴史を持っている学部で、現在1学年100人の定員のような。第三学年より専門課程に入り小人数のゼミナール形式の授業が主となる。各学年のテストは要求度が高く、落第生もかなり出て、高学年に行くほど人員が少なくなっていることがそれを物語っている。

医学部は6年課程で、入学試験が必要な学部である。国立大学には入試がないが、この点で当大学は珍しい存在である。整った大学附属病院の拡張と共に発展が期待されている。文学部・理学部・薬学部は日本の教育システムとよく似ているようだ。

教会法学部は、ヨーロッパでのカトリック教の分布の広さと同じく、その研究の無限の奥行きと、学問的興味は特別とこのことである。当学部の学生は前もって哲学、神学の予備知識が要求されており、普通は学士号を持っている者が入学

者の対象であるようだ。全ゆる種の宗教問題に対して正しい知識と解説が求められている今日、とりわけキリスト教圏の諸国に於ては神学科と共にその重要性が大きい。

新聞学科は多数のジャーナリストを輩出しており、各新聞社の主要記者や雑誌社の編集長も本学科出身が多い。

経営学科はバルセロナにあり、ハーバード大学と教授、カリキュラムの交換などで著しい進歩と実力のほどを示している。新聞学科と共にナバラ大学に於ける新鋭である。

その他の学科、研究所も各々ヨーロッパの大学らしく、広範な国際的教育システムの配慮があるのは魅力である。

大学自体の紹介はこれ位にして、大学生活の中心である学生寮について少し述べてみよう。ナバラ大学には目下、男子寮と女子寮それぞれ二つずつある。学生寮は **Colegio Mayor** と呼ばれ、その内容設備は実に豊富である。講堂、体育設備、図書室、カフェテリア、食堂などが完備、これだけは実際に見に値するスペイン独得のものと思われる。**Colegio Mayor** の歴史は中世の大学寮に始まり全体の感じはアカデミックで一杯である。当然学生寮の雰囲気はナバラ大学の場合、特に国際的で彩やかである。食後の団らん、毎週末、祭日の映画、随時の講演会、学生祭など、学生にとって全く有意義な学生生活を過ごすには充分である。学生がしばしば個人的に教授と接触するのも寮であり、又上級生が各学部のオリエンテーションをするのにも便利な所となる。だから単なる寮ではなく、学外の教室とも言えよう。

簡単に、サマーコースやスプリングコースについて述べてみると、ナバラ大学の場合、言語学・医学・経営等の各学科が、春秋の休暇を利用して集中的に短期間のコースを実施している。特に外国人には、各外国語のコースが参加者の国際性と共に人気があるようだ。特に日本人学生にとっておもしろいのは8月のコースである。世界各国の若い学生が集まり、西語・歴史・文学・美術など有意義なコースである。雰囲気も明るく各国の友人を作るのもこの時である。週末には、バス旅行があり素晴らしい一時を送れるものと信じている。すっかりした日本人などは、一生懸命友人を作り、無銭旅行の宿泊地を探している。

最後に、ナバラ大学に学んでいる日本人の様子を伝えて今回のレポートを終りたい。現在約15人の日本人がいる。殆んど大学卒業生で、各々外国語のハンディを売服しながら、各自の目的に向かって頑張っている。最近では在学中に単身やってくる勇ましい連中も増えている。彼等に言わせると青春の一時を有意義に過してみたいとのことだが、それも別の意味で冒険の一種としておもしろいと思う。先日も日本人夕食会を持ったが「黄色い顔」の寄合は実に奇妙であった。又毎年元旦には日本大使館で新年パーティーがあるということである。日の丸を前に雑煮と日本酒の正月気分はどんなものか一度経験したいと思っている。

ほぼ日本の裏側に位置するスペインの一大学、ナバラ大学を簡単に紹介してみたが、ドン・キホーテの国エスパーニヤの異色の大学の存在と、好奇心の強い日本人が勉強していることを想像されれば直更身近かに感じられることだろう■